絲遊

泉鏡花作

一

「久濶。」

と、縞の袷に博多の帶をしめた男が、息ぜはしく、些と切なさうな聲をして言ふと、婦が、胸高に結んだ端然とした帶の上を柔かに一寸折折つて、

「眞個にねえ。」

と言ふ、艶々とした結たての圓髷の、すなほな、すつきりした鬢がなぞへに、弱々と首低れた襟脚と、其の手絡の色が白かつた。

其を見る、男の目もすゞしかつた。とばかりで、二人はものも言ひ得ない。やがて、男が痩せた肩に羽織の紐を、兩手で内端に解き掛けて、

「あゝ、熱かつた。」

と云ふ口の、手では竹で絅んだ丸火鉢を　ーー郡内らしい、尤も聊か綿が入つたらう、が、此の温氣にはもつけの僥倖で、さらりとした　ーー　茶と

藍と紺の段々の座蒲團の傍へ引寄せる。

「此を隔てに、同じ蒲團の端を殘して、娘掛にすらりと薄い、焦茶と紺の小辨慶のお召縮緬は鐵火ながら、褄の深い婦の膝。

で、鳩と云ふ身で、兩人が、言合せたやうに斜つかひに對向。時に、正午過ぎ一時前、五月半の眞日中も、青葉の蔭はもの靜寂。で、身動ぐ衣の音する氣勢。女中が廊下を運んで來る、と遠くから音が聞えさうに思はれる、其の跫音も、丁ど響かず。

久しぶりに顔を合せた。心なら、風情なら、世を隔てた山の奥の思ひがすると、蒲團の染も、土色に日射の隈、翠を透した樹立の下に、草を褥の趣がある。

「暑かつたでせう、何うしたつて陽氣なんでせうね、お節句のうちは冷々して、・・・・・今日は又急に恁うなんですもの。」

と手紙ぐらゐに小さく疊んだ、ーー　坐つた膝の

傍に輕く置いた、ー　紫の風呂敷の端を取つて、細りした胸のあたりを其のうつ向いたまゝ、そよ／／と煽ぎながら、片手を火鉢の縁に掛けた。

然うした婦も、引寄せた男も、火鉢を扱ふ工合と言ひ、風采はどちらも寒さうに見える。

其の所爲でもあるまいが、火鉢に又、女中が火を入れた事。

こゝの内では、客あつかひに、まだ春のまゝ、煙草盆には取替へぬ。昨日今日、廣くて室の數が鶴、龜、梅、萩、とばら／／あつて、つい手入れも届かないか、床の間の掛花括の矢車草は、急な暑さにしをれたが、火鉢の灰には雛芥子が、めら／／と眞赤に咲く。

其れが、紅梅の散るやうに、婦の手にちら／／映る。・・・・・宸へるかと思ふ、しなやかな指のさきで、幽に縁を刻みながら、夜が寐られぬか、はれぼつたい、目ぶちをほんのりと顔を上げた。

が、馴れた、遠慮のない、打明けた、解けた瞳で、

「餘程、お待ちなすつて。」
「あゝ、待たされたぜ。」
「濟みませんねえ。」
と言ふと、颯と曇つたやうな濃い睫毛、と忘れたやうに煽ぐ手を止めた。其の紫を膝に落すと、重いものゝやうに再びうつむいて見た。
「ついね、支度はしても出憎くつて、」
男は腕を拱きながら、
「お前、無理をしやしないかな。」

二

「否、家の都合は可うございました。ですから手紙を出したんです。」

と煙草を一口、とんと静かに拂いた様子は、然うした事にはもの馴れた、落着が胸にあり、青葉に帶の影が濃く、煙管の烏金艶やかに、

「けれども、ね、さあ出ると成ると、平時と違つて、女中にも氣が咎めますもんですから、故と落着いたやうにして居て、それでも、そは／＼するんだわね。一度外へ出てから、貴方、紙入を忘れたのに氣が付いて、又取りに戻つたり何かして。それも銀貨入れだけは持つて居たんですもの。・・・・・途中は別に要る事もあるまいと思つたけれども、おまゐりをして、其から買ものがある分で、御覽なさい。」

と煙管を落して、手を輕く其の紫へ≪。

「風呂敷を持つて出たんでせう。紙入を忘れたまゝでは、をかしいと思つて、慌てゝ取りに歸つたり・・・・・遲くなつて濟みません。餘程待つて？」

「餘程處か、七時間、」と眞顔で云つて、然も疲れたらしい顔をする。
「嘘ばつかり、まあ、大袈裟な事を。」
と唇の紅が濡れたやうに、婦ははじめて莞爾した。
「否、眞個だよ。」
と時計を見て、着ゆるみのした袷の襟を、ぐいと合せて、
「唯今、一時と些と過ぎです。十二時頃と云ふお約束からは一時間ぐらゐしか後れて居はしないがね、待つたのは大變だぜ。」
「何うして。」
「家を出たのが、七時半。」
「七時半？・・・・・今朝のですか。」
「逆に日が暮れて堪りますか、串戲ぢやない。」
「何處か寄り路をするつもりだつたの？」
「氣ばかり急くもの。」
と男も微笑み、
「うつかり寄路をして茶でも呑まうものなら・・・・・分けて此の頃の心持だもの。どんな半間な事を喋舌つて、やつは何うかしてるぜ、なんて言はれようも知れないからね、誰も友蓮の處へ寄つ

て來るつもりぢや、はじめからなかつたんだ。實は大掃除なのさ。」

「お宅が、」

と些と乘出す。

「あゝ。」

「丁ど可かつたわね。」

「何、可いものか。」

「だつて出よかつたでせう。」

「出るのには可いが途中が困つた。・・・・・今まで、何うして何處に待つて居たと思ひます。」

「然うね。」

と優しく打傾く。・・・・・

男は拗ねて、小突くが如く火鉢を押して、

「よ、お國さん。」

「ほゝゝ、」と何か慌しげに、件の風呂敷を手まさぐりに取つて、細く口許を蔽うたのである。

「今しがた、其處の通りで、待あぐんだお前さんが、前途から、薄い茶色の洋傘で、漸と盆ほどな小さな蔭を拵へて、一人で町の左側を此方へ來るのを、引手繰るやうにして見附けた時は、荒物屋の前の、

郵便箱の前に居たんだから、お前さんが、後れたと思ふ、雑と一時間、彼處に立つて居た事と思ふだらうけれど、・・・・・何うして、彼方此方ふら／＼して、其までの弱りさ加減。第一・・・・・」と言ひかけて、室のうちを〓した、が、廊下の様子を聞いたのであつた。

誂へにはまだ間があるか、遠くからさへ、女中の歩の響いて來さうな氣勢もない。寂然とした、廣い家の何處か一所に、ことん、と球を突く音がする。

三

男は窓越しに、庭を視た。

「手紙で然う言つてお寄越しだから、お前さんを待合はせようと思ふ、肝心の橋がないぢやないか。まだ驚いたのは、あの川さへなく成つた。水が干たばかりなら可いけれども、すつかり埋つて、窪地の焼砂と來て、眞赤な埃が立つて居ます。・・・・・歳暮に二人で通つた時から此方、やがて半年と云へば半年だけれど、餘り早い變りやうだね、悉皆埋立てたものらしい。

確か、そして、私の方から此方へ渡ると、橋の袂に、大きいんぢやないが、柳が一本あつた筈だね。」と言ふ、庭の其の青葉の映つた顔には、深く物思ふ影が宿つた。

婦も、同じ色の、且つ果敢なさうに、

「えゝ、ありました。ですから、昨日の手紙にも、橋の袂の柳の下で待つてゝ下さい、と書いて上げませうと思ひましたけれど、・・・・・陰氣ですから

ね。・・・・・故と止めたんです。それでも、何故だか、矢張り、あの柳の蔭に待つて在らつしやるやうな氣がしてね。電車の中でも、人さんの襟も扱帶も、青いものばかり目に着いて、・・・・・息苦しいほど、急に恁う暑いのに、其れぱつかりが冷々〈と、・・・・・あの、其こそ、つかまつて一口吸ひたいほどに思ふんでせう。

一人のなんか、茫乎するほど熟と見詰めて、私、極が悪かつたわ。・・・・・其の人の插して居た、翡翠の珠が欲いんだ、と思はれたでせう。

電車は直き橋の詰へ留りますから、すぐ其の目の前に、貴方が立つておいでなさると・・・・・いくら氣を靜めて居ても、又然うでもない、はツと思つて、ふと通りがかりの人に見られて惡いやうな樣子があつては不可ませんですからね、一町場前で下りて、故と澄まして歩行いて來たの。それでも見通しですからね、下りると直ぐに青いものが見えるだらう、と遠くから柳ばかりを、・・・・・もう見える筈だと思ふのに、見えないぢやありませんか。

おや、場所を間違やしないか知ら、と其處等振返つて見たり、〓したりしても、別に、處は違ひはしないのに。・・・・・柳ばかりなら可いけれど、急に胸が動俸々々して、もしか御都合が惡くつて、それで來て下さらないのぢやなからうかと、此の蔭一つない眞晝間が、貴方、何だわ。眞暗に成つたやうな氣がしたわ。

然う・・・・・・川もなくなつたんです か。・・・・・川も埋りませうよ。・・・・・・・私達を逢へないやうにする世間ですもの。柳も伐つたんでせうよ、貴方に暑い思ひをさせようと思つて。あの、それでも、よく感心に郵便箱を立てゝ置くわね。」

「何故？」

と聞返しながら、膝を摺らして、片手を横ざまに疊へついた、男は心着いたやうに苦笑した。

「何をくだらない事を言つてるんです。」

「でも、嬉しかつたわね。」

「嬉しかつた？　何がさ。」

「柳の許よりか、道が半町ほど、早く顔が見られたんだわ。」

「其のかはり、天狗に攫はれた奴が、ストンと落し置かれたやうな面だつたらう。尤も來がけに愛宕山の頂邊へ、ぼかん、と立つて、何處かの煙突の尖へ胸が引かゝつて泳ぐ形で、黄ばみ切つた品川の海を凝視めた圖なぞと來た日には、憚りながら、お國さんと云ふ婦を狙つて、隱形の印を結んで、花道へ糶上つたものとは我ながら思はれない。何うしても鼻の高い赭ら顔の大山伏に引つかまれた體でね、實は我ながら心細いものでしたよ。」

「可厭ねえ。」

と今度は婦が、蒲團ごと火鉢を押して、

「貴方また高い處ぢや足が萎むの、目がぐら／＼するのつて身體を弱くして居る癖に、何だつて、愛宕の上へなんか上つたのよ。」

お聞きなさい。其よりか前に、日此谷公園の藤棚の下から、池の周圍を廻ること凡そ三度・・・・・」

「あゝ、置いて行つて可うございます。」と、圓髷を品よく、撫肩ですらりと見向くと、銚子取つたを

差置(さしお)いて、手(て)を支(つ)いて女中(ぢょちう)は出(で)た。

四

「お酌をしませう。・・・・・」

最う今めかしい、然うした中ではなかつたので、男は手酌の方が氣易いのであつた。

「偶會ですもの。」

で、手なりに、なよやかに銚子が傾く。男は忘れたやうに一口飲んだ。

「家鴨は相變らず達者で居ますか。」

「何の、家鴨。」

とばかりで、肴も挾まず寂しさう。

婦は清しく目を〓つたが、もの可懷しく思出した心が籠つて、

「公園の、あの、池の。」

「然うだ。」

と卓子を輕く拍つて、

「うつかり言託を忘れたつけ。・・・・・今度逢つたらお國さんが宜しく、と言ふんだつたね。時間はあり過ぎる醉に、氣ばかりわく／＼するもんだから薩張り氣が付かないで惜い事をした。・・・・・

嘸、不人相な人間だと思つたらう・・・・・いつかのやうに八九羽居たよ。」

「貴方、あの時を覺えて居ますか。」

「矢張り、待たせられた事かい。」

「ま、何うせう、」と切なさうに莞爾して、ふと手を返して眩しさうに、男の目から遮つて、翳すが如く前髪を打つ、と一所に白い珠の簪が搖れる。

「だつて、あの時は地の利を得て居ましたよ。公園で出逢ふなんざ今時の商賣往來、戀の手習には持つて來いです。・・・・・おまけに、お前さんは知るまいが、兵法に日くさ、天の時は地の利に如かずさ、可いかい。・・・・・然も其の天の時が、眞夏の明方、烏瓜の花がほつと眠さうに睫をあけようと云ふ、風はなくても涼しいんだ。・・・・・藤棚はあり、樹立はあり、池はあり、贅澤千萬、噴水まである。・・・・・芥子の花は咲いてるし、勿體ないことには、家鴨まで泳ぐ。其が鴛鴦でないまでも。

ね、處で、あの水へ、少々、薔薇か白百合と云ふ香水を加藥に入れて、葡萄酒を氷で冷して、四阿で

飲んでる處へ、お前さんが透通るやうな色をして、絽の裾模様で、朝顔の瑠璃の中へ、露でしつとりと顯れてゞも御覽なさい。

罰の當つた、・・・・・人間には些と職過ぎて居ますから、私なんざ、忽ち目をまはす處、・・・・・可い加減に待たされて、此方は夜あかしをしたんだらう、・・・・・薄茫乎で、藤棚の柱に凭れて、うとうととした處へ、漸つと、寢ぼけた、と云ふセルに白縮緬、素足に晝夜の引掛けは可いとして、目を擦りながら・・・・・」

「ほゝほゝ。」

「洋傘を袖で抱込むやうにして、小走りに、はら〳〵とおいでなすつた樣子は、些と又娑婆過ぎたものだつけ。・・・・・尤も薫床しき鬢の毛の、と云ふ香水の景物だけはあつたけれど、何の所爲か大分寢亂れてさ。」

「最う・・・・・私、澤山。」と婦は邪慳に、ぷる〳〵と銚子せ搖る。

「お止し！・・・・・早く醉はさうと思つて、面

倒くさいもんだから、そんなになさらないでも、お爛はよくついて居ります。」

「憎らしい。・・・・・あの晩は、夜中から酷く差込んだつて、分つて居るぢやありませんか。」

「だから、其だから先刻待つうちにも大抵氣を揉んだつたらないんぢやないか。・・・・・約束は違へた事のない人だし・・・・・少々〳〵此方が我まゝな無理を言つても。・・・・・其を自分から時間を丁と然う云つて寄越したのが一時間餘りも後れるから、其の間の心配つちやありやしない。急に持病が起りやしないか、飛んだ間違ひでも出來たんぢやあるまいか、と・・・・・其が、ーー　恁うお互に覺悟して、今日は都合が惡いから、又晩になり、翌日なり逢はれるんぢやないやうに成つたんだからね　ーー

此を思ふと、同じ、もの足りない、果敢ない中も、まだ、あの時分の方が增だつた。」

「あゝ、最う止して頂戴。」

と孅弱い胸に手を置いて、

「痛んで來さうで、惡いからさあ、・・・・・」

五

「だつて、お國さん、お前が。」

と男は崩しかけた膝を、きちんと合せて、卓子に兩腕を組んで掛けつゝ、

「其の時の事を覺えて居るかつて聞くんぢやないか。だから忘れない、これ／＼だつて。」

「否。」

お國は又俯目で、

「忘れないで居て、聞かしておくんなさいます。私・・・・・其を聞くのは嬉しいけれど・・・・・・あの、今言つたのは然うぢやないの。・・・・・・あの時、四阿の前の他の岸へ、私最う坐りさうに成つて、貴方と二人で、ーー　そして、私が、心配事で鬱込んで、水の上へ、何か、果敢ない假名を書いて居たら、向うの噴水の下から、同じやうに、すら／＼と字をかきながら、水あしを優しく引いて、づゝと手許へ寄つて來て、袖の蔭へ入つてくる／＼と廻りました、可愛らしい家鴨かあつたでせう。・・・・・何のためだか胸がせまつて、私が手巾で目を壓

へたら、貴方もほろりとなすつたやうで、一生あひ鴨をたゝうかツて、然う云つたぢやありませんか。今朝見た時に、其の鳥を覺えて在らしつたか、・・・・・あの、其を聞いたんですよ。」

「何だ、お嬢さん、鳥の事か。私も錢があると、お夥間の鴨だなあ。」

と煽切りに呷と干して、

「黄色い嘴が揃つて居るもの、どれが、あの時のだか、家鴨の顔に見覺えがあるものか。」

だから、男は情がないつて云ふの。緑色の首で、眞白な羽で・・・・・菖蒲の紫がまだ咲のこつた中に、そりやあ美しい鳥だつた事よ。今でも居さへすれば、私は丁と覺えて居る。・・・・・あの時の池の景色は、時々〳〵夢に見ますもの、貴方が船を漕いだり、私が其の鳥の背中に乘つたり、菖蒲が水を歩行いたり。」

と杯洗を熟と見ると、樹の影が薄墨を彩つて暗く映つた。煙草の煙が靜かに留まつて、

「おや、曇つたわね。」

「急に暑過ぎると思つたもの、あゝ、大分眞黒な雲が出たぜ。」

と廂越しに下蔭を透かして言ふ。

「降りはしないか知ら。」と煙管をぱつたり。で、片手を背後へ。薄い茶に一本獨鈷の博多の帶のお太鼓を一寸壓へながら、すつと出た、・・・・・羽織と足袋は脱いで居た・・・・・疊觸りの褄深く、障子の桟に手を縋つて、撫肩細くすらりと立つと、葉越しの沖も品川とて、夢の如き海を瞻めた。

「通り雨だらうと思ふ、大丈夫、降つても直ぐに霽らうよ。何時までに歸るんだい。」

「・・・・・」

「よ、お國、」　些と醉つたか、はた、と半ば其の身體を寢かした。

「それは、早いほど可いけれど、」

と海を見たまゝ、うつとりしたやうに、然う言つたが、ト向直ると、胸をまつすぐに鬢の毛の黒き裡へ、男の仰向いた顔を包むやうに、熟と上と下で目を合せた時、瞼一刷、合歡の花に霞の薄き風情あり。

「貴方さへい可きや、此切・・・・・日が暮れようと。」

と衝と戻る、褄が蓮葉に、輕い音して、淺葱色の羽二重に緑を染めた竹の葉が、すら／＼と爪尖へ、雨を誘つた風か添つて、青葉の薫が颯と立つ。

男は起きた。あらたまつた・・・・・對の姿で、

「最う、そんな事は默然、と痩我慢にも極めたつけね・・・・・時に、飯にしようかな。」

「あれ。」

と卓子臺へ伸かゝるやうに、お國は思はず手を擧げて、柱の呼鈴を壓すのを止めた。

「串戯ではない事よ。・・・・・まだ、貴方は愛宕山へ立つてる處ぢやありませんか。・・・・・せめて、あの。」

と目を〓つて、美しく眉を展いて、

「此處まで來らつしやい、一寸、」と見えぬやうに、我が前の火鉢の側を指でたゝく。

「お雛樣ぢやあるまいし・・・・・お膳を前に並ばれますか。」

「だつたつて・・・・・」

六

「だが、何だ、ね、私だつて、愛宕の山に立話は恐れます。・・・・・が、まあ、其の時を何時だつた、と思ひます、漸つと其が九時半さ。」

「まあ。」

「然も、それが、右の公園の池のまはりを、水鳥が戸惑ひをしたと云ふ形で、三度目にすつと出て、途中ふら／＼と歩行いてだぜ。十時、十一時、十二時と、まだあとが三時間、・・・・・が、また一時間おくれたらう・・・・・」

「道之助さん、眞個に。」

と姉が言ふやうに、實體に言つた。

「私、濟みません。出掛けに然うやつて氣おくれがしたばかりではないの。もつとね、思ひも着かない事で、途中手間手間が取れたのよ。

・・・・・變なの、・・・・・否、別に變な事はないけれども、まあ、然うやつて、・・・・・一丁場向うで電車を下りたでせう。見えないには見えなかつたんですが、其の柳を遠くから、青い彗星でも見

つけるやうにして、些とばかり歩行いた、と思ふと、をかしくつてね。」

と片膝を浮かしながら、頸を抬向けるやうに胸を反らした、お國は後褄を折返すばかりにして、

「歩行くのに、太脛が冷たいやうで、裾が飜々するぢやありませんか。水を撒いた刎でも上げたか、と思へば、ぢり／＼眞白に、路は黄ばむほど乾切つて居るのに、と恁うやつて、貴方、振向いて見たら、何うでせう。・・・・・衣ものゝ裾の帶の下。ちやうど其の太脛に當る處がら、うしろさがりに五寸ばかり。」

と、向直つたが、今も驚いた面色で、

「胴裏の紅絹に、此の長襦袢の。」

豫て、もの恥を太くする、・・・・・お國は、其の袖口を見せるとて、片袖、眉を隱しながら、

「色も搦んで縛れるほど、ふは／＼綻びて居るぢやありませんか。

一目見て、氣が付いたら、私は何の事も思はない、大通りで極りの惡い・・・・・それなり地面へ坐りたかつたわ。・・・・・電車なんか、澄まして下り

て、皆に見られたらうと思つてね、私、辻斬にでも逢つたやうに、慄と總身が萎んだのよ。

最う一歩出たら、發奮に、圓髷から、」

と一寸障つた、小指が反ると、掌を玉が涼しく辷べる、簪を、つと押へて、三つ四つ、ぐいと插した。

「兩方の足を割つて、ばつたり二つに倒れやしないか、と危険だつたくらゐなんです。・・・・・私、褄を前で壓へたわ。後が綻びてるんですけれども。・・・・・

「洋傘を疊んでさ・・・・・其の綻びた處へ、ぴつたり當てゝ、南風で一つ吹捲られたやうに、身を緊めて立停りましたがね、何しろ、大通りは面目なくつて歩行かれない！・・・・・人通りがあれなんでせう。」

聞く道之介は、・・・・・其の癖、初夏正午の日の下に、身もよもこがれて、寄掛つた、べんがら塗りの郵便箱は、袷を通して、胸が火の如く熱かつた折から、唯一人、烈しく搖れ光る光線の海を渡つて

來る、根のある花の萎えしぼまぬ、お國の美しい姿を見たに、不思議に凄いほど、往來は途絶えて居た筈だ、と此の時思つた。

「間違つたら。・・・・・電信柱へ・・・・・打つゝけて、絲切歯を折つぺして、それに結へて縫ぶまでも、せめて、絲一筋、何處かで、買ふなり、無心をするなりと思つたんです。

それにしても、裏町へ入つて、一人でも餘計人目にかゝりたくない、と、まさか、あとじさりして歩行くわけにも行きませんから、捻切るやうに、振向いた、其の處勝負よ・・・・・海の方へ横町は、辻々に澤山あるわね。

私が・・・・・駈込んだのは、細い露地だつたの。

ト然う思ふとね、水溜りか、川か何か、矢張り埋地ではないでせうか、一廓に成つて、思つたよりか中は廣かつてよ。

新聞らしいの・・・・・向ひ合せに、飛々に新建、

と言つても粗末な長屋が、・・・・・然うね、七八軒もあつたでせうか。皆な、何の家も戸が閉つて、寂然して、地つたら綺麗に掃いたやうに塵一つ葉もなかつたの・・・・・何しろ、誰も見ないから、まあ、と思ふと、ひとりでに涙が出たわ、泣いたわ、私。」

七

「斜違ひに見える、その、向う側に、よろ／＼とした細い柳の葉の、捩れ／＼に垂れたのがあつたんです。赫々と照りつけられて、青いものは、朝つからはじめて見たやうな氣がしました。

節だらけな、それでも新木造りの小さな長屋が一軒、其根にあつてね。低い軒の、廂の下の、小店らしい處から、・・・・・然うね、七十の上を越したと思ふ、偏い、額から頤へ恐しく寸の詰つた、短い顔を出して、鼠色の蓬々髪を、それでも襟頸へ、ピンと反して切下げにした婆さんが、ーー　脊が低いんだわねえ　ーー　頤で這ふやうに、下の方から此方を覗くのよ。

「人可懐さうなの・・・・・だつて、其の隣も、此方隣も、私の立つてた背後の家も、不殘空屋で、其の柳から前途は、石をごろ／＼ころがした、だゞツ廣い野原見たいな空地に成つて居て、犬の子一つも居ないんですもの。

絲を貰ひませう。・・・・・まあ、地獄で佛のや

うに思つて、頼みに行つたら、其の婆さんは、誰も居ない、皆で二室ぐらゐな内に、留守居でもして居たらしい。廂の下の雨落の上が、すぐに框の六疊ぐらゐで、其の端近な處で、白い桶を一個置いて、苧をうんで居たんです。

すう／／・・・・あの何とか言ひましたね、むら／／と恁う、霞が晃々光る・・・・・一寸、そんな風に絲を捌いて　ー　針は何なの、ぐた／／な、縞目も分らない布子の襟に刺して居たのを拔いて、而して、其の紡いでた苧を撚つて、目の達者なのが自慢なんでせう、婆さんが、自分でめどを通して貸してくれたの。

何にも言ふ事はないわ。・・・・・いきなり、其の縁側のない、框の敷居に腰を掛けて、筋が違つたつて、と身體を逆に。」

と又振向き、

「踵を帶に附着けるやうにして捻向いて、其の綻びを縫止めたんです。

其のうちにも氣が急くでせう・・・・・然うでな

くつても時間がおくれて、貴方が待つて在らつしやるだらうと思つて。

小さな銀貨を一つ置いて、其の横町を急いで、通へふいと出ると、何だか花道へ突出されて、あとが、しやりゝと露地口の幕が閉つたやうな氣がする わ。・・・・・　貴方の立つて在らつしやるのを見たのは、それから、何だけも歩行かない内だし、すぐに此家へ來たんですから、何でも直き此の近所だわね。婆さんが柳の下で苧を紡いで居た處は。其でも、何だか遠い處の、野中の一軒家でもあつたらしい、私、夢のやうな氣がして成りません。」

道之助は額に手を置き、卓子に肘をついて、何かもの案じするらしかつたが、婦の言の切れた時、故と元氣らしく、しかし、口重く、

「恥かしがる年紀ぢやなし、引端折つて來れば可いのに・・・・・」

「そして、姉さん被りなの。」

「御勝手さ。」

「そりや、駈落をする時だわ・・・・・でなきや、

貴方が向う岸の柳の下に立つて居て、川が埋らずに、橋のない時。」

と吻と息すると、肩がなえたやうに、手を支き反らして胸を張つた。帶のあたり胸へかけて、横雲がかゝるやうにい眞暗に成つた大空が座敷へ入つた。

顔は一際しろ／＼と、

「矢張り夢のやうだわね。」

「先刻の夢だと、其の桶から苧が水に成つて湧いて出て、新開に菖蒲が咲いて、お前さんが家鴨に成る・・・・・」

「首は青いかも知らないけれど、羽は餘り白くはない。」

と衣紋を一寸緩げる、襟裳細く紅に、胸の雪がくつきりと、

「私は少し醉ひました。」

「いや、眞面目に。」

肩が聳えて、男は腕を一ツ組直した。

「夢と言へば話がある・・・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊8

八

「例の如くさ。お前さんと段取か出來て居て、何處かで逢はうと云ふ處らしい。・・・・・こんなに、今日待たされるしらせだつたかも知れないが、約束の時間までぶら／＼と歩行く了簡。

で、當人足は地に着かぬが、人が見たら下駄を引摺つてるやうだらう・・・・・腕を組むでもなし、懐手をするでもなし、仰向くでもなけりや俯向くでもない。自分では、つい通りだけれども、矢張り他人目には、何とも持扱つた、取留めのない形で、うつかり出た處が、何處か、廣い通りの電車路だ、とまあの、お思ひ。

「朝にしては黄色だし、晩方にしては白し、正午にしては蒼過ぎる。・・・・・時刻は解らないが、・・・・・出會がしらに、赫と光つて、蜈蚣が一卷半捲いたやうに、滿員の手と足で眞黒に埋つた

のが、ブーンと唸つて鳴つて來たので、ハツと退つて、刎跳ばされた形で、すぐの横町へ突入りながら、ばあ、と顔を出して、御随意にお急ぎ下さい、と電車に言つた。・・・・・此方はお國さんと云ふのがあつて逢ひに行きますつさ、・・・・・可い氣なものぢやないか。

夢だから、默つて聞きつこ。

「お前が、先に勤めて居た時分の、家から見える、・・・・・あの大時計ね、二階の欄干へ手を支くと顔が打突るくらゐだらう・・・・・待てよ、あの大時計の數字の中へ、赤か青か色電燈で、暗號を顯す工夫はないか。然うすりや危なつかしい手紙にも及ばないものを、と其の癖あの大時計が、今度圍はれた家の角にあるつもりさ。そんな愚にも付かない事を考へながら其の横町を入ると、存外一廓で中が廣い。・・・・・

今聞いたのだ、と新建の長屋が七八軒、ばら／＼に不行儀に並んだらしい、其處は違ふ。私の見たの

は箱をさしたやうに整然と並んで、失張り、どれも皆牢屋で、寂冥して誰も住まない。端の小家の廂さがりに、同じく柳が青い葉を弱々と靡かしてゐたんだ。」

「まあ、夢で？」

「あゝ、・・・・・其の柳さへ乾き切つた、何か青紙でゝも刻んだものゝやうにばら／＼して居るのに、道わるでね、地はどろ／＼してずぶ濡れで、下駄の歯へねば／＼と附着く、・・・・・ぐつたりと其處らが黒いから、白い長屋が、浮上つたやうに見えた。」

と言ふ。折から墨を流した雲が、天井へかさなるばかり。で、二方の壁が、夢の其の長屋の如く見えたのだ。

お國はフト聲を忙しく・・・・・

「お待ちなさい・・・・・道之助さん。然う言へば、私が言つた其の新開も、ぴつしより、ぐづ／＼に濡れて居たの、其處だけ撒水をしたらしく、」

「妙だなあ・・・・・で、矢張り此も、其の柳から前途は、だゞつ廣い野原見たいな空地さね。あゝ、

石がごろ／＼してね。私の見たのは、其の周圍、處々／＼青竹の柵があつた、お前の話には無かつたね。」

「えゝ、」と唾をのむやうに云ふ。

「何かい、而して其の婆さんが、框に二人で苧を紡んで居た雨落ちに、手水鉢はなかつたかい。」

「ありましたとも。私、咽喉が乾いて、息が切れてなりませんから、あゝ、其の水でも可い一口飲みたい、と思つたくらゐですもの・・・・・でも、もう些とだと思つて我慢をしました。腰さへ立つんだか何うだか、怪しい、年寄を、臺所へ立たせるのは氣の毒でしたから。」

「私は又・・・・突のめつて轉んだんだ。躓いたか辷つたか、其處は解らないが、もろに兩手をぐしやりと支いた、丁ど其の柳のある長屋の前さ。

はつと立つたが、心持が心持で、自分でも危なつかしく、うか／＼して居た處だから、げつそり痩せたか、と思ふほどでね。」

顔容はお前さんの言つた方が委しい。朦朧として居たが、今聞いたので判然解つた。・・・・白髪

の切髪、寸の詰つた、其の通りの婆さんが。」

婦は、衝と白い手で、話を遮るやうにして、

「可厭ねえ。」

「だつてい這ふやうに顔を出して覗いたのよりか増だ。・・・・・手水鉢の前に立つた、と云ふが、膝を支いたくらゐ、曲つた腰で、私の方へ、此方へ乗出す形をして、柄杓に水を汲んで居たらうぢやないか。

年寄のしんせつ、難有い、と手を出すと點々と掛けてくれた・・・・・たしない水で、おまけに、ぬらぬらと生温かつたけれども、そんな贅澤を云ふ場合ぢやない。

婆さんがまた、緒を立てゝ遣らう、と言つて、すぐに桶の、其の苧を、皺びた指にからんで捌く・・・・・

先方に言はれるまで氣が付かなかつたも變だけれど、轉んだ時か、前端緒が蟲のあたまを捻切つたやうに弗つりと切れて居る・・・・・

最う其の時に悚然とした。

ぐな／＼の膝を、框へ乗出すやうにして、婆さんが、下駄を取つてきてくれた。

まあ、禮を言つてさ。さあ、思の外手間を取つた・・・・・今度はお國さんの方が辻に立つて居ようも知れぬ、と急いで歩行かう、とすると何うです。

たてたばかりで、切れはしないが、其の端緒が他愛もなく、づる／＼と指を離れて拔けるぢやないか。拍子拔けがして踏止まると、づるこけたのが、づる／＼とひとりでに動き出す。と、繋がつて、尾を曳くやうに、横端緒が一所に成つて、ずるりと、下駄の臺を地へ拔けた、と思ふと、ぬら／＼と伸びて、やがて一尺ばかりの、ぼつたり胴太りのした蟲に成つた。

何の蟲だか解らないが、濕々と、恁う、蛭の滑つた膚へ鱗を生して、ドス赤の皮の上へ、いぼいぼの紫だつた奴が、下駄から、ものゝ五六尺も離れた、と見ると、急に勢づいて、畝々と胸中を捻つた時、

蚯蚓の頭へ突通しに耳が生えた形の首を、むくりと出して、鎌首のやうに擡げたつけ。柳の幹へでも上りさうに、のら／＼と走つたが、や、迅い。

足が片一方氷のやうに成つた、其の時の心持と言つたらなかつた。

驚いたのは、媼さんの膝の周圍にも、壁にも、天井にも、・・・・・手水鉢には、めら／＼と宙へ畝つた、同じ蟲が幾つとなく居て、それがね、媼さんと一所に、熟と私を見たんだ。　目が覺める、と冷汗が流れるやうさ。」

「道之助さん。」

と呼ぶお國の聲は變つて居た。

手酌で一人傾けながら、何の氣もなく、然までの注意も拂はないで居た道之助が、呼ばれて顔を見て驚いたのは、お國が色を變へて居たのである。

「何うしたの。」

「私の縫つた絲も何かぢやないでせうか知ら。」

「詰らない事を、夢なんだよ。」
「否・・・・夢の方ならまだ可いけれど、私は、現に今しがた。」
と、ものいひも暗く沈んで、
「見なくつちや・・・・一度、見ませうね。」
で、其まで、氣を緊めて居たやうだつた、急に慌しく胸を弓なりに脊筋へ曲げた、が、框に掛けて針を運んだ時も然うしたらう、太脛の白いまで、踵を高く擧げながら、襦袢のはづれに褄を飜した・・・・お召縮緬の縫目の條を、不氣味さうに熟と視たが、
「あゝ、」と言つた。
「何うした。」
「え、」と其のまゝ蛇に卷かれたか、と素直に立つて、振映るばかりに、背負上を解いて、博多のを、ずる／＼と弛めて落すや、二つ三つ足踏みに扱帶を解くと、雪を被つた翠のなよ竹、小袖は白い羽二の裏を返して、すつと鳴つて、撫肩を、辷つたが、
「あれえ。」と裾を刎ねて身もだえした・・・・

「襦袢が一所よ。」
裏を通して、長襦袢をともに縫留めてあつたのである。
と廂も軒もさつと鳴つた、光るやうな雨が篠を亂して横ざまにかゝつた中に、お國の姿は、白絲の瀧を砕いて戰ぎながら、
「切れるものを、切れるものを、・・・・・・媼さんの絲は皆蟲よ、蟲よ、繋つて動いてるわ。ーー道之助さん、女中を呼んぢや可厭。」
と烈しく頭を掉つたので、櫛が拔けてカチリと落ちた。殆んど發作的に肩を搖つて、汗も絞るよと、目も當てられぬ。
盞を落して茫然として居た道之助は、お國が長襦袢さへ、脱棄てようとするのを察して、狼猊しく、長い廊下を、俄雨の暗がりに、壁へ打突りさうにして帳場へ駈着けた。
切れものを、と云ふ時、人は心して、濫りに、剃刀、庖丁などを貸すべきでない。
帳場では小刀を貸した。

引掴んで取つて返して、何心なく襖を明けたが、道之助は思はず、ハタと閉して退つた。

お國の身は、美しい、衣を離れて、座敷の隅に、雪に手足を刻んだやうな、あからさまな姿で居た。

「投げて。頂戴、放り込んでよう。」

と縋り着きさうな悲しい聲。

「危いよ、危いよ。」と此方も、ものいひが亂れながら、襖を細目に密と投げた。

あとを又、ぴつたり閉めたが、・・・・・然うした婦の白身に小刀がある。

道之助が、思はず足を爪立てた時、ころん、とドシヤ降の雨の中へ、球突の球の音が、はたゝ神の如く響いた。

「あツ、」

と言ふお國の聲が、途端に耳を劈いたので、我を忘れて、衝と入ると、楓と電が瞳を射た。

竹の翠の、其の羽二重より美しい、萌黄を浴びた

ー　氣あせりに怪我をして、左の掌に鮮血の迸る、婦の身を、肩なりに、冷たく確乎と膝に抱く時、蒼白なる面に皓齒を結んで、

「道之助さん。」

「確乎おし・・・・・」

「貴方、貴方、殺して頂戴。」

「氣を鎮めて、お國さん。」

「家へは歸れやしませんから。」

唯、見ると長襦袢さへ重ねて透して、裙を色紙形に切抜いたのが、吹き込む風に、雨ながら、ちら／＼と散つて飜然と動いた。が、夢の斷片に媚かしく艶なる彩して、柳に掛けたやうであつた。

【完】